

道  
（二十五卷四、三九米）  
增補  
十五卷一、三九米

帝幸未時代映畫  
曾根純三兒稔三  
木狂

紹介 小宮 晃 第四百七號

作は十返舎一九の膝栗毛だが、こゝでは、そ  
から東海道中の事件を取り入れた程度のもの

、殆んど、脚色者、同時に監督者たる曾根純が、これを書き卸したやうなものである。

如何にして、彌次郎兵衛と喜多八が、江戸をつて東海道を膝栗毛しなければならなくなつたのである。

か、さいふ双六で云ふ、日本橋ぶり出しまで、既に五巻以上の物語が盛られてゐるのだ。それだけなら、が、その途中に於いて、

人に關聯した、仇討やら、捕物やらを盛り込ために、更に、その仇討出發顛末及捕物事

のいきさつ、を執拗に思ふ程彌次喜多兩人に  
びつけて、物語られてゐるのだから、堪らな

「兩人が、日本橋から品川へ面白い旅が始まる頃には、折角御膳立の御馳走が冷えかゝつてしまふ」

三島通りおで来るさ もうこれから先ま京  
までの御交際は、断り度くなつてしまふのは  
然る。事實、この映畫、「赤坂蓮木の孤化」

「までに、實に堂々廿卷になんこさしてゐるだから、假令それが、一つの事件を切

したら面白いには違ひながらうが、<sup>筋力的に</sup>まつてしまふことは想像に難くない。執拗さ

、此の上に、一九先生が如何にして、膝栗毛なるケツ作を書いたかといふ、エピソードまで

「女給」以来、帝キネのレツテルを代表する  
うな手品のみを發表して、頃りに名を擧げた

音根純三氏も、遂ひに、こゝで馬脚——良い章

で、現じたといふ形である。  
脚色、既に斯の如く膨大にしてさりさめもなく、實出も亦効果なき努力に終つてつうで

以上、演出は亦効果を發揮力に繋げたやうである。杉狂児の演技にのみこの映畫には救ひがある。小宮一晃も悪くはないが、杉には一步落ちる。

鈴木澄子、森靜子、河津清三郎、市川玉郎、松本泰輔、阿んざ贅澤なキヤストだらう

して徒らに綺麗なキヤメラ。—鈴木重三郎—  
行價値——こういふ映畫の興行價値は、その

映時機が可成左右するであらう。それから近人に一彌次喜多」このニワカ趣味が果してア

（七月）常盤座） ヒールするか、どうかも疑問である。